

岩手県指定有形文化財一関市千厩町 村上家住宅の現況と復原考察

The Current Condition and the Theorization of Restoration of the Murakami Residence, Ichinoseki, Iwate

宮澤 智士
MIYAZAWA Satoshi

安井 妙子
YASUI Taeko
阿部和建築文化研究所

The Murakami residence is a farm house since the 18th century. The residence consists of six thatched-roof buildings, including main building, which is over 200 years old, stable, water closet, and room for miso (fermented soybean paste). The residence has been renovated as the life style changed. In this paper, the following aspects are discussed: an assessment of the current condition of the residence; an estimation of the constructed time; and theorization of the original building; and the strategies for further preservation. Currently the residence is preserved by the owner; however, it has been beyond the owner's ability to maintain the residence, the author addresses the necessity of public support to be listed as an important cultural property.

キーワード
茅葺き民家
主屋・付属屋
岩手県指定文化財
建物の復原考察
主屋は江戸後期建築

第1章 村上家住宅の概観

1-1 茅葺き建物6棟と調査研究目的

村上家住宅が所在する一関市千厩町小梨は、岩手県南東部の丘陵地帯の集落で、樹木が茂る森のなかに家々が1軒、2軒、また3軒と点在している。村上家はそのなかの1軒で、当屋敷は「搦道屋敷」と通称されている(図1)。

村上家住宅の建造物に関する主な調査として、当家住宅を岩手県指定文化財として指定するために、佐藤巧東北大学名誉教授を代表とする東北工業大学、東北大学のメンバーによって実測調査が行われた。その結果は『村上家住宅実測調査報告書』(私家版)として報告されている。実測図面は優秀でほとんど誤りがない。かつて主屋の復原平面図が提示されたことがあったが、あまり厳密なものではなかった。これら従来の報告等により村上家住宅の概略は知られてきた。しかし、全般的な復原考察に関しては不足を感じ、また、調査結果は必ずしも広く知られているとはいえない。

そこで本研究では既往の報告を参考に、村上家の敷地および敷地内に建つ茅葺き建物6棟と石造小祠などすべての建造物を対象にして、先ずその現状を把握し、復原考察の精度をあげ、また、建築年代を推定し、確実な学術資料になるように努めた。現地調査は、平成22年(2010)9月に予備調査、同10月23日から27日までの間に本調査、その後若干の補足調査を行った。

1-2 村上家の歴史、建物の建築年代

村上家の歴史は十七世紀まで遡ることが、同家の墓石に刻まれた年号や、菩提寺である松寿山常楽寺所蔵の過去帳などから推定できる。以下で推定の根拠となる資料をあげる。



図1 村上家住宅搦道屋敷配置見取り図〔佐藤1996〕の図面に一部加筆、彩色)

1) 墓石の刻銘

菩提寺の常楽寺は当家から歩いて五分ほどの距離にある。当寺院伽藍の背後に広い墓地があり、その一画に村上家代々の墓がある。

墓の前面に基壇上に立つ位牌型の新しい墓石を祀り、この背後に自然石を加工した古い墓石が重なるように立ち並んでいる。古い墓石の中で最も古い年号は、元禄2年(1689)11月22日に亡くなった父「虚珊浄空信士」、宝永2年(1705)3月2日に亡くなった母「旧宗妙白信女」の法名を刻んだものであり、法名に続いて「敬白 清之助 父母」の銘が刻まれている。

この墓石が立てられた時期は明確でないが、村上家のこれに続く古い墓石は寛延3年(1750)の刻銘をもつから、宝永2年以降で寛延3年以前の間のある時期に立てたと推定できる。当墓石は常楽寺墓地では最も古いとのことである。なお、「清之助」の名は、図3にあげる宝暦4年(1754)「茶盃建立證文」にもみえる。

最も古い墓石に刻まれている夫妻が何歳で亡くなったかは不明であるが、仮に六十歳前後で亡くなったとすれば、十七世紀中頃には生まれていたことになる。

2) 古文書

村上家所蔵の古文書中に次にあげる高野山参拝の証文二通(図2, 3)がある。

- a 「茶盃建立證文
[茶盃の図 a]
於高野山金剛峯寺蓮華谷五大院道場建立焉
宝永貳年七月八日 法印祐順
賀藤庄九郎殿」
- b 「茶盃建立證文
[茶盃の図 b]
於高野山金剛峯寺蓮華谷五大院道場建立焉
宝暦四戌六月廿八日 法印祐義
村上清之助殿」
- 高野山参りをして「茶盃建立」をしていることから、当時の

村上家は相当に裕福な家であったことが知られる。この証文の宛先である「賀藤庄九郎」と「村上清之助」に関しては次のことが判明する。

賀藤庄九郎が建立した茶盃の図 a に、梵字「𑖀」に続いて「旧男虚珊浄空禅定門灵位 元禄二年十一月廿二日」とある。これは、先にあげた当家最古の墓石にみられる刻銘と法名、没年が同じである。したがって、これらは同一人物であり、清之助の父親であることが判明する。

賀藤庄九郎はいかなる人物であったかを知る詳しい資料は今のところない。

3) 過去帳

菩提寺常楽寺は1800年ころに火災にあい、過去帳は200年より以前のものはない。2010年10月25日、筆者は村上和子氏と常楽寺を訪ね、住職と令嬢の指導のもと過去帳を拝見した。当寺が所蔵するもっとも古い過去帳は文化13年(1816)正月の記があり、当寺十三世鳳山代に始まる。搦道屋敷村上家に関して、過去帳にみる最も古い法名は文政8年(1825)であり、平成3年(1991)までの間に12人の法名がある。これらの記録をもとに、千厩町史編集委員である村上光徳氏の調査資料等を補足して、代々搦道屋敷村上家を継いできた方々の法名、氏名・名前、生年・没年等を書きあげたものを表1に示す。

以上にあげた高野山参りや墓石等の資料から、村上家は相当経済力のあったことが知られる。また、村上和子氏によれば、当家が盛んであった明治期には分家が10軒ほどあったという。

上にあげた資料によって、搦道屋敷村上家の歴史が江戸時代後期、十八世紀まで遡ることは確実である。

一方、主屋をはじめとする古い建物の建築年代を知る資料は今のところみつかっていない。比較的近年の建築では、井戸屋形が昭和63年(1988)、新便所が平成6年(1994)であることが、棟札(図42)や村上和子氏からの聞きとりから知られる。また、近年の改修として主屋前面の縁側の整備が、新便所建築と同時期の平成6年に行なわれた。

建築年代を知る手掛のない建物については、構造形式や間取

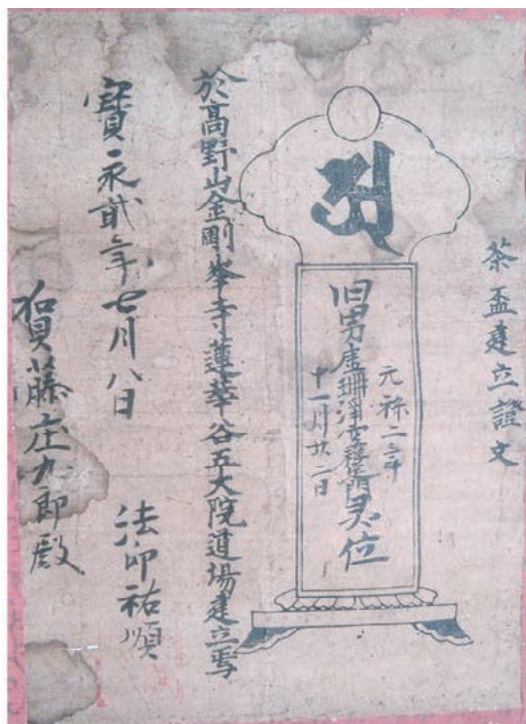


図2 宝永二年「茶盃建立證文」賀藤庄九郎あて



図3 宝暦四年「茶盃建立證文」村上清之助あて

表 1 搦道屋敷村上家の代々（括弧内の数字は（生年－没年）
＊印は村上家の代を継いだ人、◎印は過去帳に見えない

○唐女堂 専蔵母			
○卯右衛門□□			
①文政8酉年条 千蔵＊（?－1825）			
「全身良輪定門 8月9日 からめとふ 千蔵事」 千蔵			
②（?－1825）			
「無縁妙心信女 8月14四日 からめとふ 卯右衛門□□」			
以下、過去帳に次のようにある。			
③文久3亥年（?－1863）			
「10月29日 善哉普聴信女 唐女堂専蔵母」			
④明治14己年 専造＊（1809－1881）74歳			
「4月7日 覺應壽明居士 村上清之丞父 専造			
（村上専造 74才）」			
⑤明治28年 つる（1810－1895）86歳			
「 唐目堂ノ			
旧11月19日 壽室妙園大姉 村上虎之進祖母つる			
（村上ツル行年86才）」			
◎清之丞＊《天保4年生－大正5年没（1833－1916）》			
虎之進父			
⑥明治34年 きせ・清之丞先妻（1833－1901）			
一説に《天保4年生・明治35年没》			
「旧12月8日 良林妙大姉 村上慶一郎祖母」王編＋良			
◎なつ 弘化2年生、清之丞後妻（1845－1913離婚－）			
大正二年離婚			
◎虎之進＊《安政4年生－明治31年没（1857－1898）》			
清之丞長男・慶一郎父			
◎さつき 《安政5年生－昭和2年没（1858－1927）》			
虎之進妻			
⑦大正5辰年 慶一郎＊（1882－1916）			
「 カラメド			
旧8月17日 清温義徹居士 村上慶一郎」慶一郎			
⑧昭和27年度 いし（1881－1952）			
「慶光軒法園妙徳大姉 9月22日 カラメドー			
村上慶一郎才」			
（「才」は「妻」でいしか）			
⑨昭和38年度（?－1963）82歳			
「 カラメドウ			
慶雲軒法輪道永居士 2月5日村上磐根父			
行年82才」			
五十嵐以和四郎が父？			
⑩昭和50年度 磐根＊（1892－1975）84歳			
磐根は婿養子			
「磐禪軒光正得道居士 10月11日 84才			
村上壽道父磐根」			
五十嵐以和四郎長男			
⑪平成2年度 つかさ（1902－1990）慶一郎次女、88歳			
「 平成2年			
浄磐軒智室貞蓮大姉 5月7日 88才			
カラメドウ 村つかさ」			
⑫平成3年度 壽道＊（1924－1991）68歳			
慶一郎次女・磐根の妻			
「壽学軒智研道秀居士 平成3年3月3日			
壽道磐根長男で和子夫			
カラメドウ 村上光志父			
光志は暁子夫			
壽道68才」			
暁子は壽道長女			



図4 村上家住宅の環境。中央の大きな茅葺き屋根が主屋

り等の分析、また他の民家遺構を参考にして推定する。具体的には、部材表面の仕上げや風化の状況、使用している釘が角釘か丸釘か等を調べ、また、構造形式やデザインを復元的に考察する。こうした編年研究により建築年代を推定する。当初形式を推定する資料として、村上家所蔵の明治22年(1889)家相図(図44)も参考になる。

この他、炭素14の年代測定法、年輪年代学の方法は、様式編年とともに建築年代を推定する有力な手段もある。

1－3 敷地とその環境―県指定文化財

村上家住宅の敷地は不整形で(図1)、周囲に広狭の道路がめぐり、その内外に樹木が豊かに茂っている。敷地南側の小道から中へ入ると、正面左寄り中央部に茅葺きの主屋(母屋)が南面して建つ。敷地内の付属屋には、茅葺きの馬屋(マヤ)、厠(カワヤ)、小家(コエ)、木小屋、井戸屋形の計5棟(図32～40)があり、これらの付属屋は主屋の東南方から背面北側にわたって建っている。また最近に新築した鉄板葺きの新便所、薪小屋の2棟が、馬屋の東方にある。

上にあげた木造の建物のほか、主屋西側で木小屋南方の樹木のなかの小高いところに、小規模の石造明神さま5基が左右に並べて祀ってある(図43)。また、井戸屋形の脇にも石造の水神さま1基が祀られている(図41)。庭園は、主屋の南前面から南側の小道の間に広がり、東側から北側、西側の三方を樹木が囲み、屋敷景観を豊かで落ち着いたものになっている(図版1上)。

一般の民家では村上家住宅にみるような、一住宅の敷地内に6棟の茅葺き建物が現存する例は、全国的にみてもごく少ないとみられ、貴重な存在になっている。建造物に加えて庭園が整い、樹木のなかに石造小祠が祀られるなど屋敷構えが整っている。敷地の掃除も常にいきとどいている。

「搦道屋敷」と称される当住宅は、東北地方における江戸時代から続く上層民家の典型な事例として、「村上家住宅 主屋、馬屋、厠、小家の茅葺建物4棟および宅地(井戸、石祠を含む)」が、平成8年(1996)5月7日付けで岩手県有形文化財として指定を受け現在にいたっている。

表2 明治22年家相図と現部屋名（漢字：家相図、仮名：現部屋名）			
上手列	下坐敷、上坐敷－床・脇、納戸	《シモデ、カミデ、 ナンド》	
中 列	中坐敷－仏壇、小坐敷、茶之間－床之間、裏坐敷	《ナカマ、 ナカマ、 カッテ》	
下手列	(土間)－物置、板間	《オグラダイ、ロバタ》	

第2章 村上家住宅の建造物の現況

村上家住宅敷地内の全建造物および敷地の現況を、主屋、付属一馬屋・厩・小家・木小屋・井戸屋形・石造小祠、敷地の順に以下で概要を記す。

2-1 主屋の現況 (図22, 図版1~6)

主屋は木造、寄棟造、茅葺き平入り、平屋建てで、大棟の上に気抜き腰屋根をあげる。規模は桁行9間(17.891m)・梁間6間半(12.338m)、建築面積220.74㎡で、南面し、西方を上手として居室部、東方を下手として土間部を配している。この下手妻側の後半部に幅3間(約5.88m)、奥行1間半(2.627m)、面積15.45㎡の片流れの下屋をおろした炊事場(ダシヤ)がある。

なお、今回の解説にあたって、主屋の各部屋などの名称は、佐藤巧氏の報告書掲載の図面にしたがうことにするが、一部名称が記載してない箇所は適宜判断して紛らわしくないと考える名称を付けた(表2、図5、図22)。

1) 立面 (図6, 9~13)

正面 立面で最も特徴的なのは正面である。正面は一見したところ二階建てに見間違えるが、実は平屋建てである。正面の軒を出桁造とし、軒高が比較的高い。正面の下半部は縁側ないし土縁としているため壁面線が半間奥まった上屋通りに見えるように見える。上半部の壁面線は半間迫り出している。こうしたことから一見二階建て風にみえるのである(図10~13)。

大戸口は東端から3柱間目の位置に開く。大戸の幅は4尺ほどで、当主屋が大規模であるのに対して狭い。大戸口脇から上手イタノマ、ナカマ前面5間半にわたって内縁がある。縁先に雨戸を建て、内縁西端のナカマ前面に大型で屋根付きの手の込んだ戸袋が付く。ただ、もっとも上手のシモデ前面の二間は滞縁で、縁内に雨戸を引き、簡素な戸袋を付ける(図13)。

上部壁面には、中央部に板戸4枚を建てる。東端上部にアルコーブを作って鶏小屋にしているのは珍しい。

背面 背面(図9)は、茅屋根が上屋から下屋、さらに孫下屋まで下り、正面と較べて軒先が低い。孫下屋の両端はさすが破風となっている。土間部背面上手半分からカッテまでの三間



図5 主屋土間部の詳細図

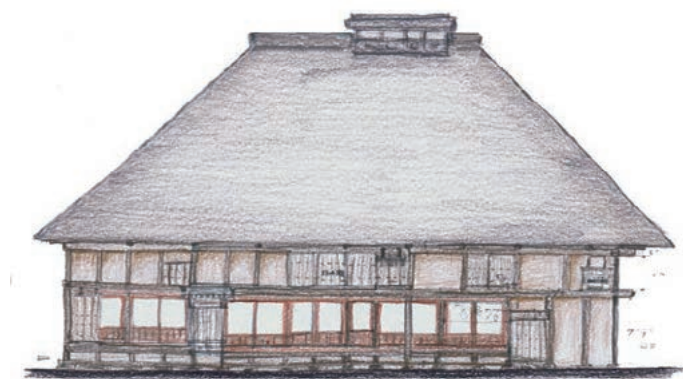


図6 現状正面スケッチ

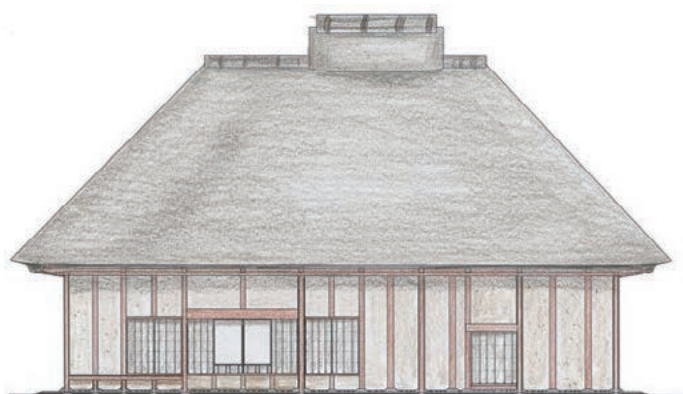


図7 復元正面図

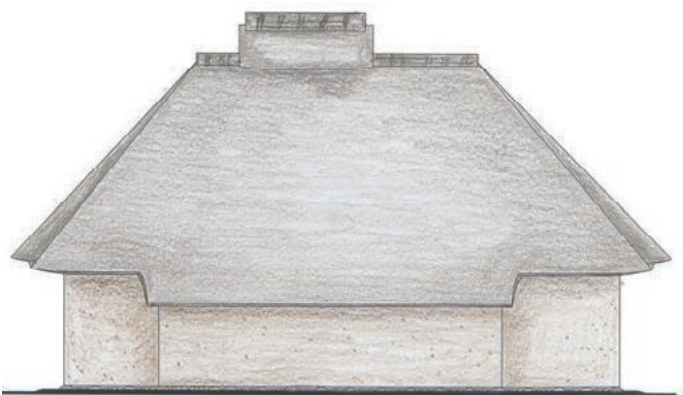


図8 復元背面図



図9 背面と上手側面

半は雨戸付きの開口部で、両端に簡単な戸袋を設け、小さな濡れ縁を設ける。他は土壁の、真壁造である。

東西側面とダシヤ 西側面にはカミデに一間の板戸引き違い、続いてシモデに半間の板戸引き込み開口部を開き、ナンドには半間の柱間2箇所の上に格子窓を設ける。他の壁面は土壁の真壁造である(図9)。

東側面の前半部は土壁の真壁造、後半部は後補である片流れのダシヤを張出す。その東面に半間の板戸引き込みの出入口(背戸口)を開き、他は土壁の真壁造である。

2) 平面1—土間部 (図5, 14～16, 18)

現在の土間ニワは比較的狭く、前面幅3.33m、奥行3.7mで、後半部は幅を0.4m程広くする。正面に大戸口、ダシヤ境に元の背戸口が開いている(図22)。

大戸口から入ると右手の上屋柱筋の中央部に瓜むき状で多角形断面の太いウシモチ柱(柱A)が建ち、この約3.5m手前にも多角形断面のやや太い柱(柱B)が建つ。これら2本の柱と妻壁の間に床を張ってオグラダイ(小倉台)と称する台が作り付けてある。今はないが、かつてはオグラダイ前方の半間4方の土間に白を据えて、ここで粳を搗いて玄米にした。背戸口の両脇に大小のカマドが築いてあり、背戸口脇の柱にカマド神を祀る(図50)。土間ニワに沿って、前半部に十畳大のイタノマがあり、中央部に大きな炬燵が切っており、根太天井を張る。後半部は、土間ニワを囲むように逆L型の板間がめぐる。間仕切りは設けないが、イロリのある部分をロバタ、この奥をタナマエ、この右側をハシリと称する。天井を張っていないので梁組、小屋組、屋根裏がみわたせ、土間と一体の空間になっている。

前半部イタノマの床板材は、ほぼ中央に入る框材の左右で異なっている(図5G)。つまり、框の居室側は元々の広縁であり、土間側は後世に床板を張り増し、部屋として使えるように改造した。

後半部の逆L字型の板間部分も、元々は広縁と小規模なタナマエを設けたものであったと思われる。そして、前半部の広縁を拡張したさいに現在の形に整備したものと考ええる。

3) 平面2—居室部 (図17, 19, 20)

居室部は桁行5間半、奥行6間の範囲で、大小7部屋がある。上手通りに表からシモデ、カミデ、ナンドがあり、シモデとカミデは8畳2室の続き座敷である(図17)。根太天井を張り、カミデに床の間を構える。座敷背後に7畳大のナンドがあり、竿縁天井を張る。

居室部の中央には4室がある。表に間口3間半、奥行き2間半のナカマ、この背後に炉が切られた2間半四方のオカミ、この奥に5畳大で横長のカッテがある。オカミ、カッテの上手で、カミデ・ナンドとの間に、間口1間、奥行3間半のヤリカクシと称する南北に縦長の部屋を配する。

ナカマには、高い位置に根太天井を張っているが、上手から2間の位置を梁行きに通る天井梁によって、左右が10畳大と7畳半大に別れている。かつて2室に分かれていた時期があったことがうかがえる痕跡である。オカミも根太天井を張る。カッテ、ヤリカクシは天井を張っていない。居室部前面から土間部のイタノマ前面まで7間半にわたって延びる縁側で、低い位置に根太天井を張る。

4) 構造1—軸部の構造 (図23～26)

軸組は上屋と下屋からなり、背面下屋の先には^{げげや}下屋(孫下屋)を下ろす。柱は、外周壁部分では半間ごと、開口部では半間または1間間隔に建てることを原則にする。ただし、正面の外縁



図10 正面と庭園、右は馬屋

図11 正面、右上は馬屋軒裏

図12 正面の下手詳細

図13 正面の上手詳細



図 14 大戸口から土間ニワを通してカッテを望む。右手に太い柱Bが建つ
 図 15 土間ニワの2本の太い柱A、B
 図 16 イロリから下手土間ニワをみる
 図 17 シモデからカミデをみる。正面左はトコノマ

図 18 土間ニワからイロリ、その背後のムソウ窓をみる
 図 19 ナカマからシモデをみる。右手に神棚
 図 20 シモデからナカマをみる。神棚前に五月人形を飾る

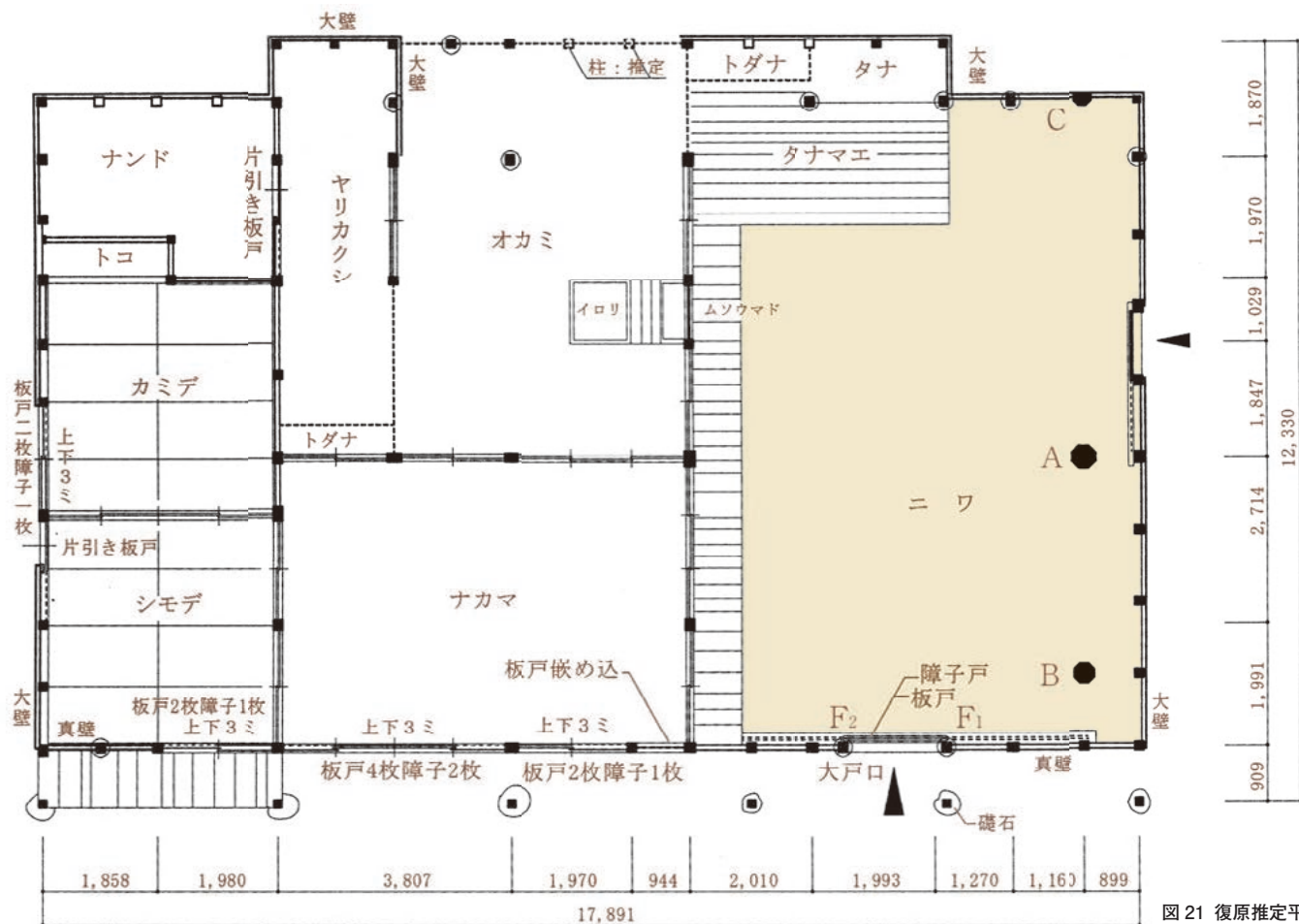


図 21 復元推定平面図

- 当初材一ほぼ全体が建築当初である材
- 一部当初材一柱頭、脚部等一部が当初材
- 中古材(当初材ではないが相当に古い)
- 新材一後の取替えがはっきりする新材
- 推定整備材一直接の物証はないが整備した材
- 転用材一他の建物からの再用が明かな材

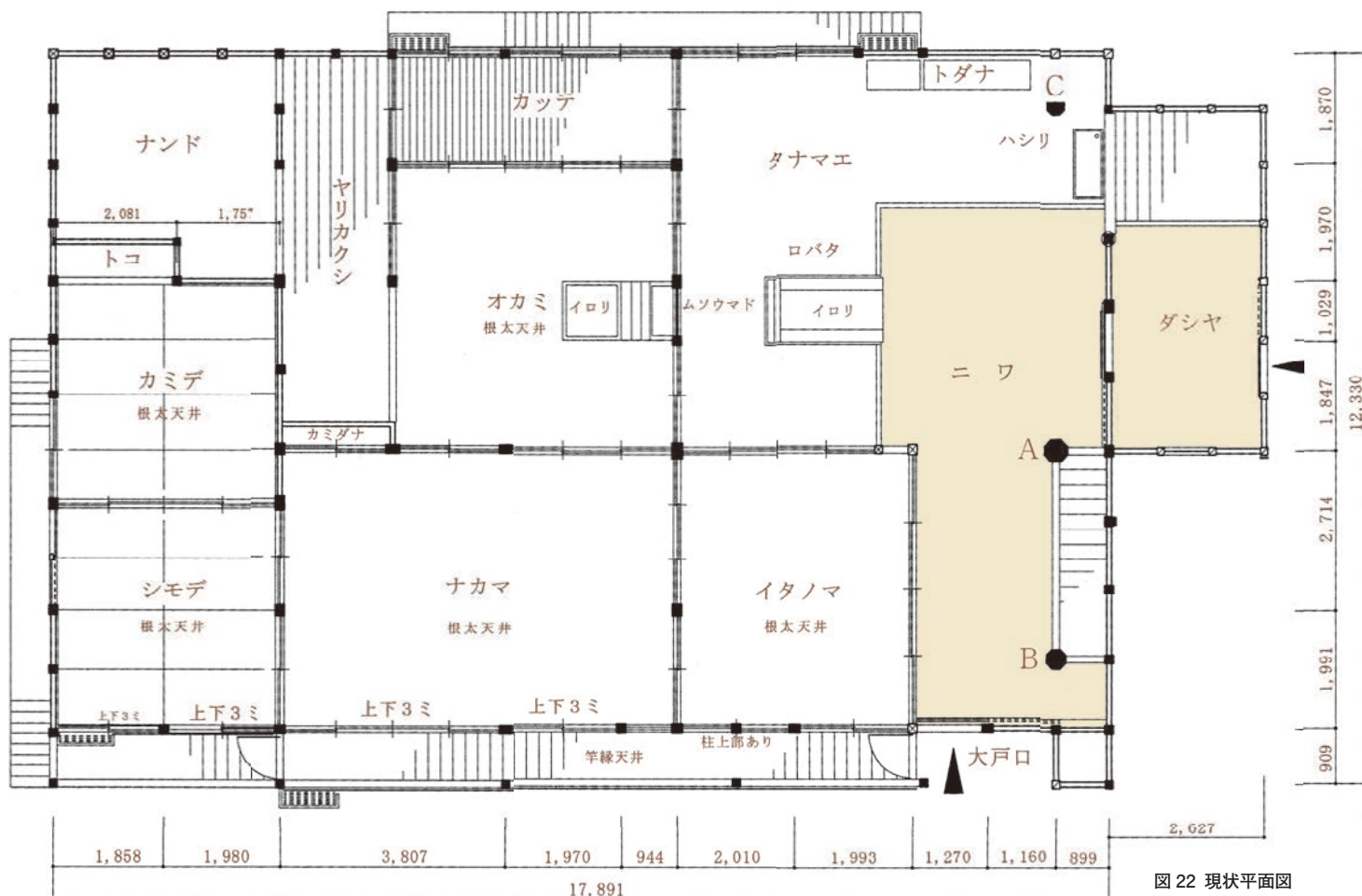


図 22 現状平面図

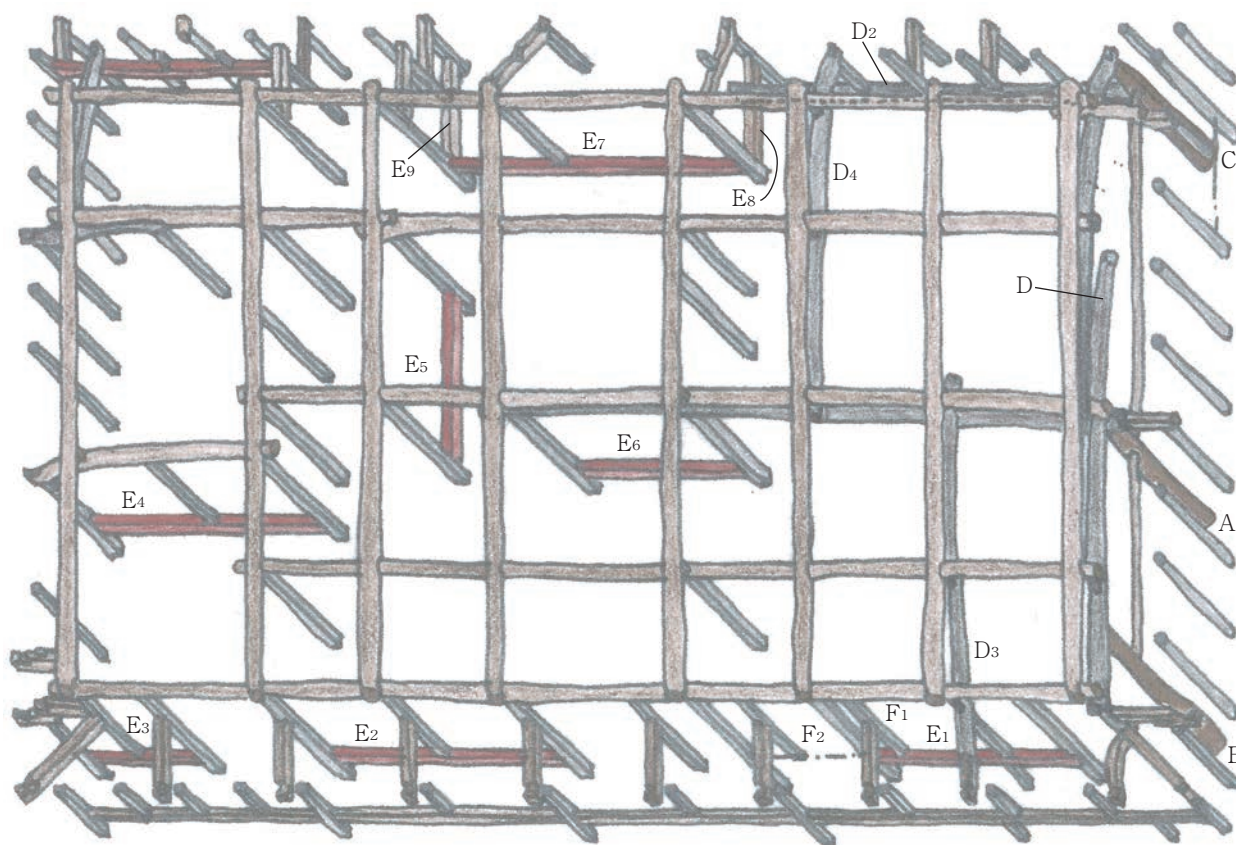


図 23 構架図—茶色の水平材は差物 (E₁ ~ E₉)

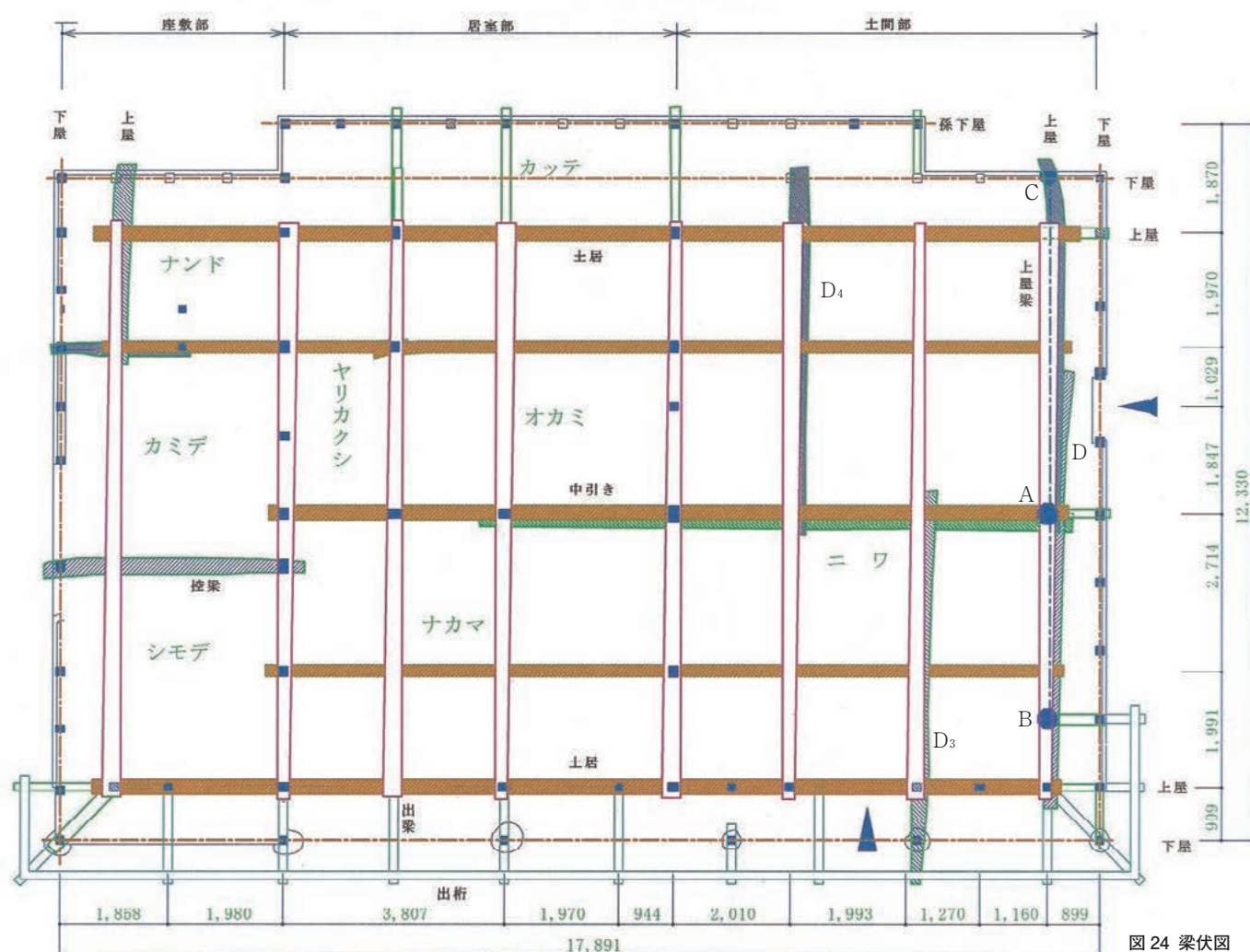


図 24 梁伏図

に2間、内部の間仕切りでは、1間、1間半、2間の間隔に柱を建てる。柱間に建具を建て、また、床の間、仏壇などを構える。開口以外の箇所を壁とし、原則として半間間隔に柱を建てる。

梁組は、下手の土間部、中央の居室部、上手の座敷部とで架け方が異なっている。土間部と中央居室部では、梁、桁を格子状に組む。座敷部は簡素で桁行梁は2本のみで梁の間隔が広い。梁材はいずれも丸太ウリムキ状で、この地方で土居と呼ぶ上屋桁も梁と同断面である。

土間部は、梁を格子状に複雑に重ね合わせて、見せ場になっている。これに対して居室部は中央を通るウシ梁（ナカビキ）以外は単純に一重である。

土間部、中央居室部、上手座敷の順に梁組の要点を記す。

土間部の上屋の広さは桁行3間半×梁間5間である。この下手中央に建つウシモチ柱（柱A）の上にウシ梁を乗せ、その上に梁を格子状に組んでいく。ここでは梁が五重になっており、もっとも重なりが多い。

また、中央ウシ梁から下屋に延びる曲り梁D₃を前面側に、D₄を背面側にと交互に用いている。居室境に曲り梁はない。もう一つ面白いのは、上屋南東隅柱から柱Bを通して柱Aの上に架かる梁Dは、その先端が1間余り跳ねだしているが、この先端を受ける柱や束、また梁がなく、ぶらさがっている点である。その理由は明らかでないが、梃子の原理を応用してバランスを取っているのであろうか。

中央居室部の桁行は土間部とほぼ同じ3間半で、上屋梁は土間境より1間半、1間、1間の位置に配している。中引き、土居などと直交し、格子状になっている。

上手の座敷部の桁行は2間で、シモデ・カミデ境では曲りのある2間の繫梁を桁行きに架け渡し、下屋柱まで達している。カミデ・ナンド境では床柱から曲り梁を下屋柱に架け渡している。室内には上屋の側柱を建てない。

5) 構造2—上屋と下屋の4隅の納まり（図23～25）

当建物は正面とこれに続く側面の一部をセガイ造にしている。正面の下屋部分は土庇になるので上屋隅柱が室内に建つことはない。これに対して背面は土間ニワやナンド内部に上屋隅柱が建たないように桁行と梁間の梁を交叉して組み柱を建てない納まりにしており、4隅の納まりが異なっている。

南東隅 上屋柱から前方、東方、斜め前方の3方にセガイ桁に向う繫梁を出して納めている（図25）。

北東隅 ウシモチ柱（柱A）から背後の下屋柱に架かる曲梁と、上屋北東隅で交差して東側通りの下屋柱に達する梁によって、上屋柱を省略する納め方をしている。



図25 主屋南東隅の上屋柱から3方に出る繫梁



図27 主屋前面のスギ材の下屋柱（縁柱）の風化状況。

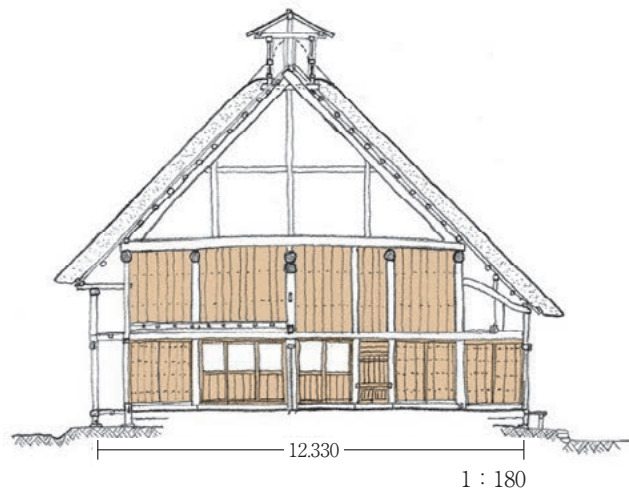


図26a 主屋現状梁間断面図 土間部と居室部境

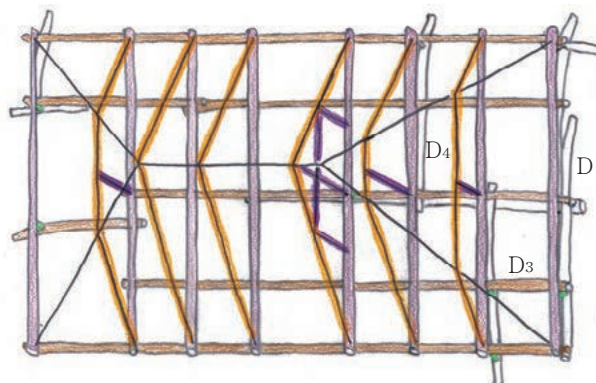


図26b サス構造の見取り図（サス材は茶色）

南西隅 上屋隅の束柱から西方、斜め前方のセガイ桁に向かって繫梁を出す。前方は、上屋隅から半間東に建つ上屋柱から前方のセガイ桁に向かって繫梁を出して納めている。

西北隅 上屋の西側通りに背面下屋に達する曲り梁を入れて、ナンド内の上屋隅柱を抜いている。

6) 構造3—差物（図23）

現在、差物を使っている箇所は、大戸口E、ナカマ前面E₂、シモデ前面E₃、シモデ・カミデ境E₄、オカミ・ヤリカクシ境E₅、ナカマ・オカミ境E₆、そして КатてまわりE₇～E₉である。この内、ナカマ前面E₂の2間は3本溝で障子引違い、シモデ・カミデ境E₄の2間は2本溝で板戸引違い、オカミ・ヤリカクシ境E₅の1間半は上下2本溝で中間に半柱を建て戸棚を入れ、オカミ・カッテ境E₇2間半は上下3本溝で、板戸と障子5枚の引違いである。

大戸口上部に入る1間半の差物では中間に柱を建て大戸を引きこむ。シモデ前面にある1間の差物は3本溝で、差物中央に建てた東でセガイ造の繫梁2丁を受ける。ナカマ・オカミ境の差物1間半は2本溝で障子引違いである。差物が入る両側の柱は、一方が大黒柱でもう一方は五平断面の柱である。このようにみていると、当初から差物を用いて本来あるべき柱を抜いているのは、正面入口、オカミ・カッテ境、シモデ前面西間の3か所である。

7) 構造4—軒・屋根・小屋組（図26、図版6上）

軒は、正面と東側面の前方1間分、西側面の前方3尺をセガイ造にしている。

屋根の茅は比較的薄く葺いている。大棟の長さは約25尺で、中央下手寄りに腰屋根が乗る。

小屋組はサス構造である。中央6丁の小屋梁上にそれぞれサスを組む。また両端の小屋梁上には斜めの隅サスを架け渡して、寄棟屋根を形づくる(図26b)。

8) 柱の断面と形状

柱の断面形は一般的に正方形、長方形(五平)、多角形のもの、円形に近いものの4種に大別できる。村上家の主屋では、円形の柱を除く3種の柱が用いられている。なかでも長方形断面の五平柱が多い点が注目される。五平柱はナカマとオカミまわりに多い。五平柱の長辺を部屋から見える見付面に配し、短辺は敷居幅に合わせている。

多角形でウリムキ状の柱は、断面の大きな丸太材から八角形に近い形状に作り出しているが、上から下まで一律ではない。当主屋では土間ニワの下手妻通りの柱A、B、C3本に用いられている。

正方形の柱には一辺の長さに数ミリ程度違いのある柱を含む。

全般的に柱は直材とは限らず、曲りのある材も多く用いられている。

9) 柱表面の仕上げと材種、風化

柱表面の仕上げ方はさまざまあるが、当主屋で目立つのは幅

広の刃形である。広いものでは5寸の柱幅いっぱいの斜めに直線の刃型を規則的に刻み残している。刃当たり幅が6寸以上もあるこの刃型をのこす道具とは何であろうか。ヨキ(ハジロ)であろうか。チョウナであろうか。この点は研究を要する。この他に、台カンナで仕上げた柱もある。

柱の材種はクリとスギが多く用いられている。クリは土間、板間まわりに、スギは表側の目立ちやすい柱、座敷まわりの柱、また、後世に取り換えた新しい柱などに用いられている。

部材表面の風化状況は前面の縁柱で特に著しい。これらの柱はスギ材で、図27にみるように固い節の部分が突きでている。

10) 設備・その他

設備として、土間部にいりり、炬燵、流し、棚、戸棚、かまど、オクラダイがある。居室部には仏壇、床の間、神棚、がある。正面東端の壁面外側の高いところに鶏小屋がある。

2-2 付属屋の現況

1) 馬 屋 (図28, 32, 33)

主屋の南東に位置し、木造、寄棟造、茅葺き、平屋建てで西面する。規模は桁行6間×梁間2間半である。建築年代は部材

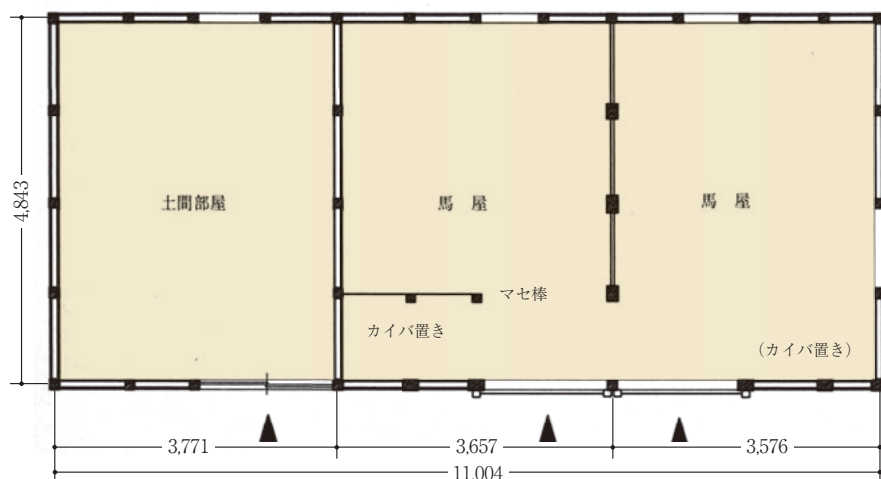


図28 馬 屋

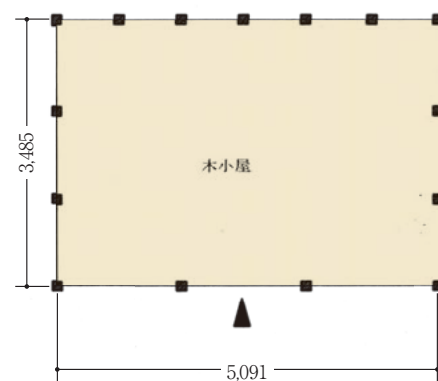


図30 木小屋

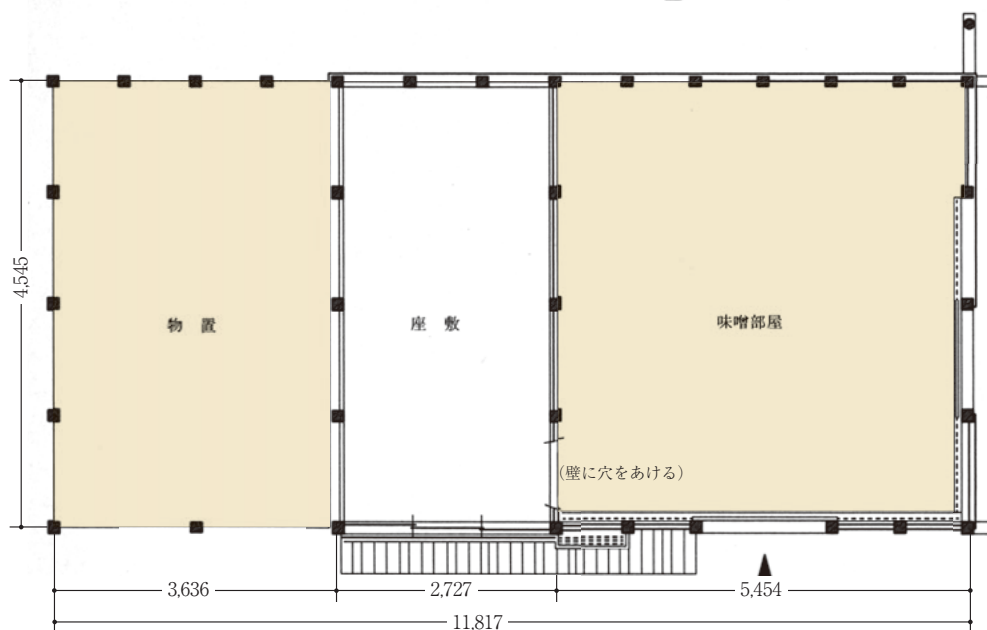


図29 小 家

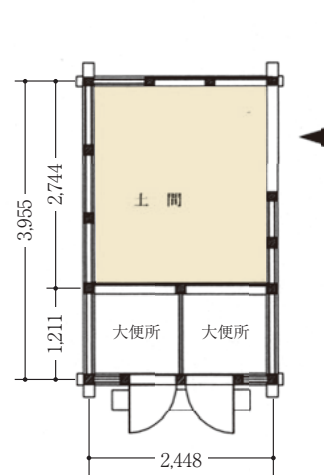


図31 廁

* 図28～31 縮尺1:100 m



図 32 馬屋の正側面。右手は厩の屋根



図 33 馬屋の南側面。左奥に主屋がみえる



図 34 コエ正側面



図 35 コエ正面を東からみる



図 36 コエ正面を西からみる。右は主屋背面



図 37 手前から厩、馬屋、主屋の茅屋根



図 38 厩の正側面



図 39 木小屋正面。左手はコエ



図 40 井戸屋形

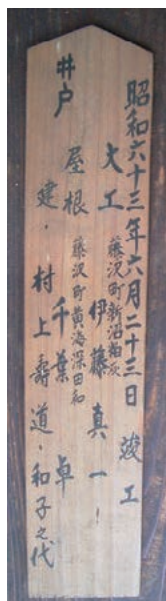


図 42 棟札



図 43 明神さま五基。それぞれに御幣をかざる

図 41 軒詳細。右下に水神さま

の風化様等からみて、江戸末から明治。現在はモノオキとしている。桁行方向を3等分し、南側の2室をマヤ、北を土間部屋にしている。マヤ同士は正面側4尺を開口とし、その他は柱と貫で間仕切るが、土壁等はなく、じかに見通せる。馬屋と土間部屋境は土壁で遮断している。すべて天井はなく、梁組、小屋組、屋根裏がみわたせる。柱は桁行は3尺ごと、梁間は全体を4等分して4尺間隔に建てる。柱にはクリの弓なりに曲がった材を多用している。側壁は、現在真壁であるが、柱外面に間渡し竹を取りつけた痕跡が残っており、もとは大壁造であったことがわかる。軒は正面のみ、小屋梁の先端を跳ねだしてセガイ造としているため出幅が大きい。小屋組はサス構造である。

この建物の構造で注目されるのは、各部屋の中央部の側桁下方の低い位置に、柱より断面が小さい角材を水平に入れて、前後の側柱を突っ張っている点である*¹。この突っ張り材は3丁が入っていたのだが、現在は中央馬屋の1丁が取り外され、仕口の痕跡のみ残っている。土間部屋まわりには土台が入るが、馬屋には土台が入っていない。ただし、土間部屋にはかつて床板が張ってあった可能性もあるが、これについてはさらに調査を要する。

マヤの出入口2箇所は、幅1間で柱の外面にマセ棒を掛け渡す。土間部屋では幅1間を板戸引き違いにする。

建築年代は、文献資料等がなく明確でないが、角釘を使用していること、柱表面の風蝕状況等から判断して、江戸時代末期ごろと考える。

現在は物置として使っている。

2) 厠 (図 31, 37, 38) カワヤ

厠は、馬屋の東南に建つ。木造、寄棟造妻入り、茅葺き、平屋建てで、規模は桁行13尺(3.955m)×梁間8尺(2.448m)である。大棟をほぼ東西にとる。西を正面として、片開きの板戸と連子窓が左右2か所に開く。この内部は4尺4方の大便所である*²。背面側は土間で、大便所に続く部分を掘りこんでいる。

柱間は、大便所まわりは4尺であるが、背面の土間まわりは各面で違っている(図31)。

軒は四周の桁上に架かる梁の先端を延ばしてセガイ造(図48)としている。出桁上にサスを組み、平面積に対して屋根は大きい。

3) 小 家 (図 29, 35 ~ 36) コエ

主屋の背後に4.5メートル程離れて平行に建つ。木造、寄棟造り茅葺き、平屋建て、平入りで、正面を南とし、規模は桁行6間半×梁間2間半である。

平面は3部屋からなり、東側の桁行3間が土間部屋、中央部の1間半がゆか張りの居室、西側の桁行2間が土間の物置で3方を吹放し壁を付けていない。各部屋間は壁で閉ざされ往き来できない点は特記する必要がある。土間部屋は正面中央間に大戸口、東側面の前から第2間に背戸口を開く。背面の西よりの2間に窓を開ける。根太天井を張る。中央の居室は、畳を敷き、根太天井を張る。正面の1間半全体が開口で建具3枚を建てる。居室前面から大戸口脇にいたる2間半に小縁を設け、土間前脇に簡単な戸袋を作る。現在は、土間部屋境の前寄りの半間の壁を姑息的に取り除いて、仮に往き来できるようにしてある。物置は前後、西側面の3方とも壁を付けず解放され、天井も張っていない。

柱は、背面および土間前面・背面に半間ごと、物置前面では1間間隔(ただし、桁下面には半間間隔に柱のホゾ穴が掘ってある)に建て、内部および東西両側面の4通りでは梁間2間半を4等分した位置に建てる。壁は全体にわたって真壁造りである。

小屋梁は、居室を除いて1間ごとに配している。小屋梁の上にサスを組む。土台は土間部屋の4周に入っており、他の柱は礎石立ちである。内法貫はあるが、地貫、胴貫は入っていない。なお、東側面通りの土台、桁の北端は2尺程北に延び、その先端に柱が建っている。

文献資料等がなく建築年代は明確でないが、丸釘を用いていること、構造形式、部材の風蝕の程度等から判断して、大正期以降の建築と考える。

4) 木小屋 (図 30, 39)

コエの直ぐ西側に建つ。木造、寄棟造り茅葺き、平屋建て、規模は桁行16尺8寸(5.091m)×梁間11尺5寸(3.485m)である。建築年代は、文献資料等がなく明確でないが、構造形式、部材の風蝕等から判断して、大正期以降と考える。床板はなく、壁はない。全体が吹放しである。柱等の部材には古材を多く用いている。

柱間は、南正面で5尺6寸前後、北面は南面の半分、東西両面は3尺9寸前後である。内法貫を4周に通し、地貫は南面を除いて適宜通している。このように軸部構造はごく簡素である。小屋組は中間の2つの柱通りに小屋梁を架けわたしサスを組む。

5) 井戸屋形 (図 40 ~ 42)

井戸は厠の東南方、敷地への入口右脇にある。木造、切妻造、茅葺き平入り、平屋建て、規模は桁行1間5尺(1.515m)×梁間1間4尺(1.212m)である。井戸屋形は昭和63年の建築で棟札がある(図42)。以前の井戸に屋形はなく、池のような井戸であって柄の長い柄杓で水を汲みあげていた。隣家が深い井戸を掘ったときに、井戸の水面が下がったので、径70cmのヒューム管を8本埋めこんで、現状の井戸に変えた。

水神さま(図41) 井戸の北背後に祀っており、一間社流造風、正面軒唐破付きの石造小祠である。基礎石の上に基壇石を2重に重ね、上の基壇石の正面に階段4級を設ける。身舎4隅に柱型を造り、地長押、頭長押をまわす。妻飾りに懸魚を付け、大きな棟をあげる。かなり手の混んだ細工をしている。井戸屋形と同時期に作った。

6) 明神さま (図 43) 石造小祠 5基

主屋の西方、木小屋の南西にあたる森の中の小高いところに、ごく簡素な石造小祠5基が並列して並ぶ。製作年代は江戸期であろう。礎石上に正面を繰り抜いた石の身舎を置き、流造風の屋根石をのせた造りである。井戸脇の水神さまとくらべると、相当に古い。

2-3 敷地の環境と近年の整備一宅地 (図 1, 4, 32)

敷地全体は樹木に囲まれており、歴史的建造物と一体をなしている。上で説明した建造物と一体をなして価値を形成している。この敷地もより良い状況で保存する必要がある。

敷地内には、前述した建造物の他に新便所、薪小屋がある。新便所は一般見学者の利用に配慮して平成6年に建てられた。馬屋の東側(裏手)にあり、切妻造、平入、鉄板葺である。薪小屋も平成の建築で、新便所の東方にある。切妻造、平入、鉄板葺である。

*1 このような横材が入る構造は、茨城県土肥家分家の主屋背後につく宝永三年頃建築の「離れ・味噌部屋」(規模4間×2間半)にみられる。

*2 当厠のように前面に大便所2か所を設け、軒をセガイ造とする例は、多賀城の東北歴史博物館の今野家にある。

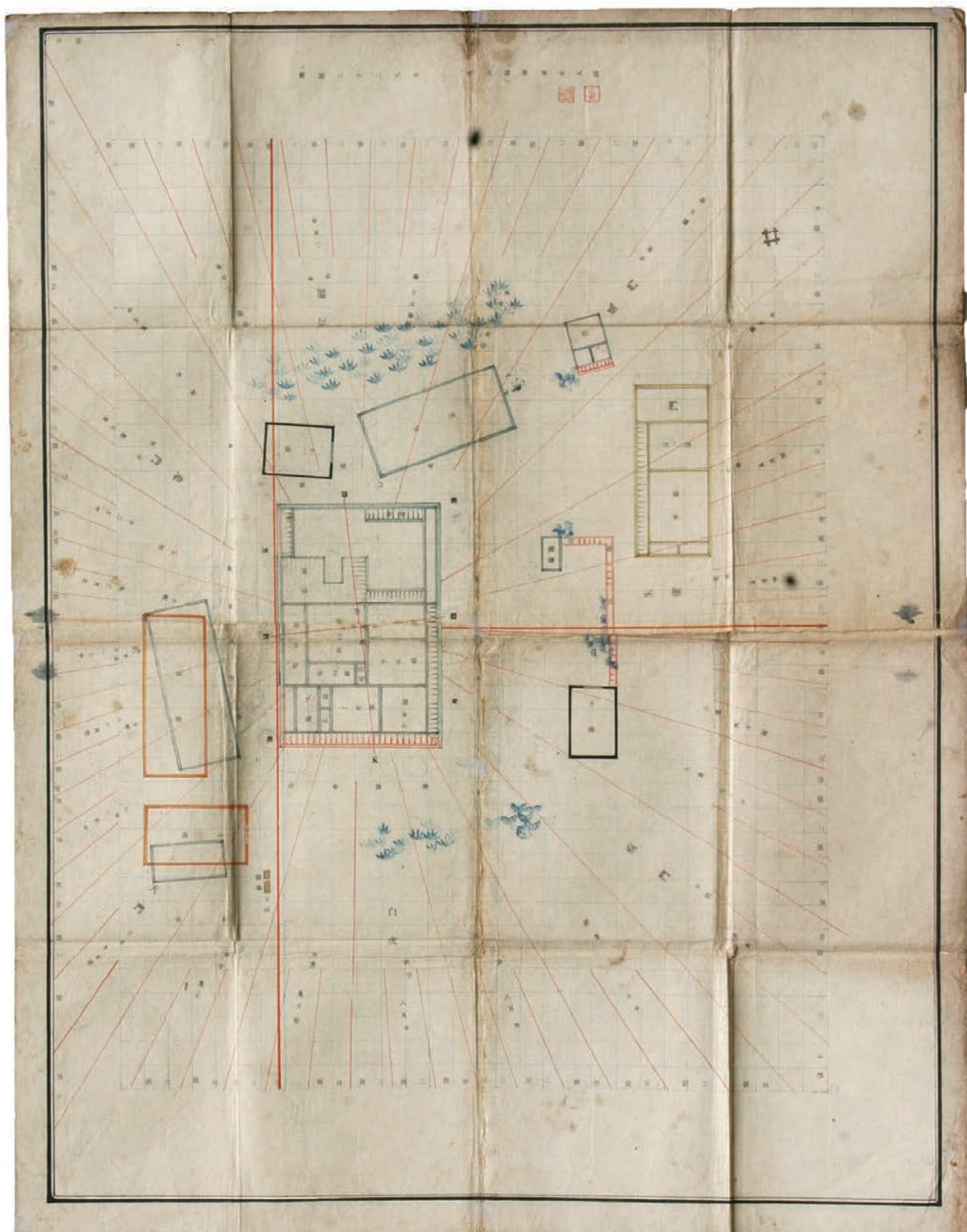


図 44
 明治 22 年家相図
 村上家所蔵
 家相図の大きさ
 927 × 726 mm
 枠線
 891 × 680 mm

第3章 村上家住宅家相図と建造物の復原考察

村上家住宅には建築に関する普請帳などは残されていない。本研究では、建物の痕跡等を詳細に調査し、復原考察を行うことを基本的な姿勢とする。ただし、明治22年(1889)の家相図があり、これも参考としたい。本章は、家相図の読みとき、主屋の復原考察、付属屋の復原考察の順に述べる。

3-1 復原考察資料—明治22年家相図(図44)

村上家は「明治二十二年八月□陰雪堂主人撰」と題する家相図を所蔵する。主屋の平面形態や付属屋の位置等から判断して、村上家住宅を描いた家相図であることは間違いない。この家相図では、和紙に1間方眼を青線で引き、主屋の中央に合わせ、赤線を放射状に引き、この上に建造物および樹木、竹藪などを描いている。

建物は、図面中央のやや後ろ寄りに主屋があり、この周辺に付属屋である、門長屋、馬屋、厠、浴室、土蔵3棟、薪置があり、また、明神、井戸がある。付属屋等のうち、馬屋、厠、薪置、井戸、明神は現在もほぼ同じ位置にある。しかし、敷地入口の門長屋、門長屋と主屋間の浴室、主屋前方・東側面・北西方の3棟の土蔵、それに主屋前面の浴室と土蔵を鍵型に繋ぐ垣は現存しない。

多くの建物は外郭線のみを描くが、主屋、厠、長屋門の3棟は間取りを描き、土蔵3棟は入口位置を示している。

樹木は厠、浴室、主屋前方の土蔵の脇、主屋の南西方、竹藪は主屋の西方、主屋東の馬屋・土蔵の東方に描いてある。

主屋の間取りは後述する復原考察によって得られたものによく似ている。家相図に書かれている部屋名と現在のものを、表2に上手列の表から下手列の順に書きあげた。

家相図では、建物に青、赤、黄、黒の4色を用いて使い分けしている。主屋背面の2棟が青色と赤色とを重ねて描いてあること、主屋西側の縁側、厠前面の縁側が赤色で描いてあることから推察すると、青色は当時の現況、赤色は新築計画であるとみられる。この外、土蔵2棟の黒色は将来の建設希望であろうか。門長屋と明神の黄色は何を意味するか不明である。

家相図の上の状況は、村上家住宅の復原考察にあって参考になるが、その扱いには当然のこととして史料批判が必要である。

当家相図では、たとえば、主屋についてみると、出入口や建具など柱間装置の具体的なことはまったく記載せずに省略している。また、カミデの床の間は幅、奥行きともに実際と異なった大きさに描いてある。家相図は家相をみるのが目的であるから、その間取りなどは家相をみる上で重要でない箇所は省略され、また、正確でない部分があるのはいたしかたない。したがって、家相図の間取りを資料として利用する際には、大筋を把握して、その範囲内で比較するととどめざるをえない。

後述する建物の痕跡調査などによる分析と、家相図との比較検討により、建築当初から明治22年までの間に間取りがどう改造され変化したか、その大筋が読みとれる。

3-2 主屋の復原考察

敷地内にある各建造物の現況は先に概要を説明した。ここでは痕跡調査等をもとにして復原考察したい。

主屋の復原考察を行うにあたって、柱、差物、梁など構造材の新旧を区別する作業がまず必要である。部材には、建築当初からの材、後世に取りかえた材、また新たに加えた材、他の建物から転用して再利用した材などがある。また、柱頭や柱脚な

ど当初材の一部のみを残している材もある。これらを精査して見極める必要がある。差物は一般的に間仕切りの中間に建つ柱を抜いて、柱間を広くし部屋間の往き来を容易にするために用いる。当家の柱は原則として半間ないし1間ごとに建ち、差物を入れて柱間を2間ないしは2間以上に広げた箇所が多いと従来思われていた。しかし調べてみると、差物を後に入れて柱間を広げた箇所は意外に少なく、図23にみるE・E₁・E₇以外の差物は当初からのものであった。この他、部屋を拡張するためには大梁(図23D₂)を新たに入れて柱を抜いた箇所もあった。

村上家住宅の主屋は、後世に構造体や間取りを大きく変えることは行われておらず、基本的なところは、建築当初の姿をよく踏襲している。改造があっても新しい感じに見える箇所は、正面の立面と内部の土間まわりである。この他に背面側通り、建具等にも改造がみられる。復原要旨を書きあげ、要旨にしたがって以下で説明する。

【復原要旨】

- | | |
|----------------|----------------|
| 1) 大戸口の復原 | 2) 前面縁側、正立面の復原 |
| 3) 土間まわりの復原 | 4) 背面側通りの復原 |
| 5) 柱間装置、造作等の復原 | 6) 間取りの復原 |

1) 大戸口の復原

現状では建物の規模に対して、正面の大戸口幅が4尺ほどと狭く貧弱にみえる。大戸口から入った土間部分もせせこましい。これらは後世の改造の結果である。大戸口を入った直ぐ左脇に現在十畳大のイタノマがある。このイタノマは養蚕のために新しく作った部屋である。この際に、大戸口の位置をイタノマの下手まで移動し、大戸口の幅を狭くした。

現在の大戸口は狭いが、現在ここに入っている大戸とこの内側の明り障子は幅が広い。大戸は幅の狭い板戸2枚を傍で突き合せて1枚にした転用の戸であるが、明り障子は幅5尺2寸ある大型なもので、旧大戸口に使っていたものと考えられた。当初の大戸口位置を確定するために、柱の向かい合わせ面に付け鴨居を取り付けた欠きがある柱間に、明り障子を合わせてみると、柱間のほうが多少広い。ただし、現大戸口の内法に入る新しい差物上に立つ東柱(図21、23のF₁、F₂)間隔は5尺5寸5分であり、大型の明り障子がちょうど当てはまる。差物上に立つ東柱F₁とF₂は建築当初は下まで延びていた柱であることがわかる。これによって元々の大戸口の当初の位置と幅が決まった。

2) 前面縁側および正立面の復原(図6~7)

2-a) 前面の縁側(図5、12、13)

現在、居室前面の下屋部分全体にわたって縁側がある。この縁側は、シモデ前は濡縁、ナカマ・イタノマ前は内縁で縁先に雨戸が建ち、その左端に戸袋がある。縁側、雨戸、戸袋ともに村上和子氏が新しく作ったものである。前面縁側の復原にあたり、シモデ、ナカマ、イタノマ各部屋ごとに前面の状況を調べる。

シモデの前面 シモデ間口は2間で前面に濡縁が付く。柱間装置は左右両間の敷居鴨居ともに3本溝が突いてあり、板戸2枚引き違い、内側明り障子1枚の3枚戸形式である。雨戸を用いず引き違いの板戸で雨仕舞いをしている。復原すると、向かって右間は現状と変わらず3枚戸形式の開口部、左間は柱内側に大壁の痕跡があるから土壁の大壁で閉鎖されていたことがわかる。大壁が外側でなく内側に付いていた理由は、当主屋では、正面に大壁のところがなく、ここでも大壁を見せない方針であったためと考えられる。

シモデ前面には建築当初から縁側があったと考える。その根拠として、①シモデとカミデは八畳2室の続き座敷であり、床

の間を構えている。②お坊さんは前の縁側から座敷に上がる慣わしになっている。このようなことから縁側が必要であった。

ナカマの前面 ナカマ間口は3間半あり、その柱間は上手から2間・1間・半間で、この前面全体が内縁になっている。現在は各間とも明り障子が立っている。2間、1間の柱間には3本溝が突いてあり、3枚戸形式の開口部であったことがわかる。ただし、2間の方は外側で板戸4枚を両開きとし、この内側の明り障子2本を両開きとする。シモデと同様に雨戸を用いず、引き違い板戸で雨仕舞いをしていた。下手の半間の明り障子嵌め殺のところは元は板戸であったと思われる。

縁側の有無は明らかでないが、ナカマ前の2間部分は、最初から差物を入れて中央に建つ柱を抜いている。ここに建つ建具も柱間が2間であることを考慮して、板戸4枚、明り障子2枚を引き分けとする形式であり、このことから内縁でなかったことは明確である。縁側がなかったとは言いきれないが、ここは土縁で、踏み石などを置いていたことも考えられる。ナカマ前面は全面にわたって土縁であったと考えてよさそうである。

イタノマの前面 イタノマの前面2間は現在、内縁で明り障子引き違いとする。イタノマ部分は当初は土間であり、この前面は大戸口になるから縁側はなかった。大戸の上手脇の柱間は、痕跡によると土壁であり、イタノマ前面は土縁であった。

縁側について以上をまとめると、主屋前面の下屋部分は、全体として土縁を基本としており、座敷前面は接客の必要に応じて濡縁を設けていたと考える。

2-b) 正立面の復原(図6, 7)

立面は、ほぼ内法位置で上部と下部に分けて、上部の壁面を下屋柱筋まで張出しているのに対して、下部は壁面線を半間セットバックして上屋柱通りにしている。このことから一見、二階建ての養蚕農家にもみえるが、実は平屋建てである。

上部には後世の改造はある。たとえば、右端の鶏小屋は後世の造作である。また、上部張出し部の壁面を受ける梁に新材を張り付けているので新しさが目立つ。

前面の下屋部分は土縁を基本にした陰影の深いデザインを採用している。戸締りをした時には、前面すべてが板戸と土壁になり、板戸を開いた時には、幅広大戸の明り障子と居室部前の4本の明り障子があらわれる。

3) 土間まわりの復原

土間部には現在、大戸口の左脇に十畳大のイタノマがあり、後半部は板敷き部分がL字型にまわっていて、実質上の土間、土間空間は狭いものになっている。また、後半部の妻側にダシヤ(炊事場)が張出しており、背戸口で連絡している。

大戸口脇のイタノマは養蚕を行うにあたり新設した部屋で新しい。このイタノマを整備する以前はナカノマに沿って出1間の広縁があった(図5)。この広縁はカマチとともにイタノマの床の一部として残っている。この板材と、土間後半部のL字型板敷きの板材と比較すると材質が非常に似ており、同じ頃に張ったものと考えられる。しかし、これらは建築当初にさかのぼる材ではないと思われ、復原に際しさらに古い材の所在を調査した。すると、ドマニワの後方から一間半の位置に古い床框があり、オカミの方まで延びている。このことから当初の板床は土間部後方に奥行一間半、幅2間程度のものが張ってあったと考える。居室部の床高は56cmほどで、土間ニワからナカマ、オカミには小縁等からあがったと思われる。

また、ウチモチ柱(柱A)とこの1間半手前のやや太い柱(柱B)間にあるオグラダイ(小倉台)は、材料が新しく、柱と台のカマチの取りつきの仕口の細工が雑であることから、後世の増設と考えられる。

平面の変遷(図45～47)

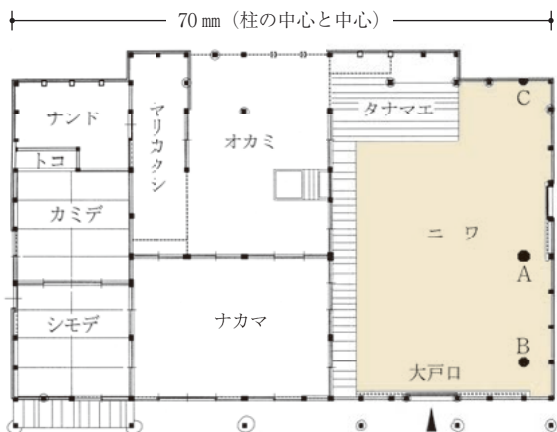


図45 復原略平面

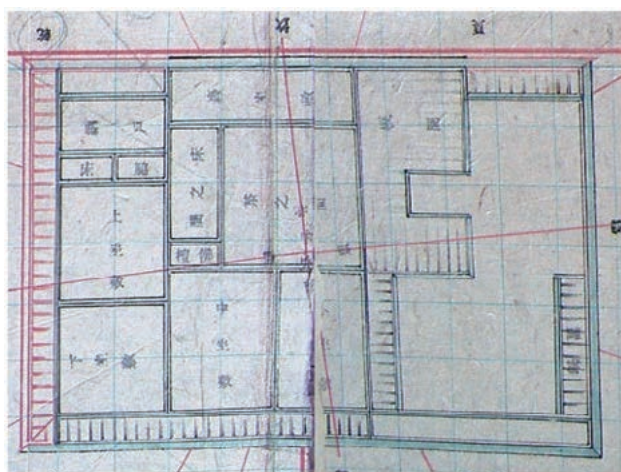


図46 明治22年家相図

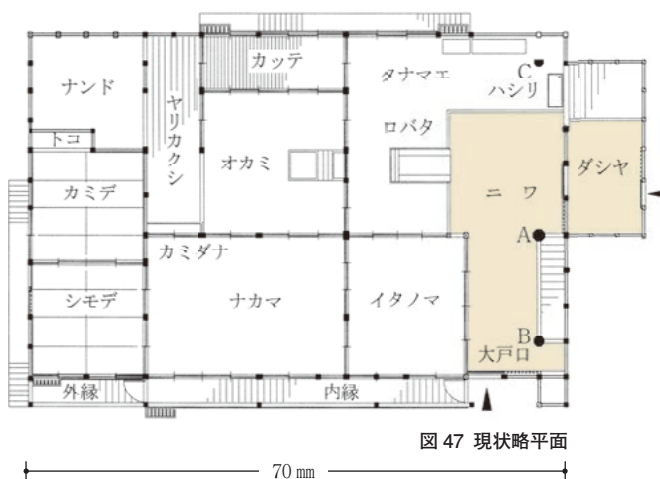


図47 現状略平面

4) 背面側通りの復原(図8, 9)

主屋の背面は現在、下屋の側通りの外側にさらに孫下屋を出し、屋内に取り込んでいるため、壁面線は一直線になっている。しかし、建築当初は左右両端部の孫下屋はなく、中央部のみに設けていた。したがって背面の壁面線は直線ではなく凸字型になっていた。背面は全体が大壁の土壁で、閉鎖的な立面であったことが推定される。この根拠を以下で説明する。

4-a) ドマニワ背面の東端部

土間部背後の下屋側通りの東端から半間内側に、多角形断面のやや太い柱(柱C)が建つ。この柱Cから下屋側通りにカッテ境の差物上まで3間半の長い梁D₂が架かっており、梁上には東

柱がほぼ半間間隔に建っている。この梁上の東柱のうち柱C自体、柱Cの上手2本、柱C下手の下屋柱の裏面には大壁の痕跡がある。また、梁D₂の仕口に着目すると、柱Cへの仕口は表側から払いこんであり、反対側の先端は差物上に乗っているのみで特に仕口を作っていない。このことから下屋側通りの梁は下屋側通りに建つ柱を抜いて、孫下屋を屋内に取り込むために後世に架け渡したことが判明する。また、孫下屋通り下手に建つ3本の孫下屋柱は中古のものとみられる。以上のことから、当初は下手から約1間半の間には孫下屋はなく、外壁は大壁で覆われていたことがわかる。なお、明治家相図には、孫下屋部分を板縁のように描いてある。

4-b) ナンド背後

ナンド背後の五本の孫下屋柱はスギ材ですべて新しく大壁の痕跡もない。したがって、これらの柱は後世に取り替えられたか、もともとなかったかのどちらかである。ナンドの下屋通りの両端の柱は古く大壁の痕跡があり、下屋通りには桁や柱が残っていないが、ナンドは下屋通りまでの規模であり、孫下屋はなかったと推定できる。

4-c) カッテ部分の復原

オカミ背後の長五畳大のカッテは4方に差物を入れている。この内、オカミ境の差物E₇は当初材か後補材かの判断が難しいが、背面孫下屋通りの薄い差物と桁は新しい。上手側1間の方の差物上には柱上部とみられるが束が残っており、当初は壁であったと考えられる。下手側1間半の方は不明であるが、上手側と同様に壁であったと考える。戸袋は新しく当初はなかった。

5) 柱間装置、造作等の復原

柱間装置および建具に関しては、図面を参照していただくこととし、個別の説明は省略する。

神棚、仏壇、イロリ、コタツ等の造作は、今回、特に精査をしていないが、明治の家相図によって、いくつかの位置は判明する。この詳細は今後の機会に譲ることとする。

6) 間取りの復原

上記1)から5)までの説明と、明治22年家相図を参考にして、間取りの復原について述べる。現状と復原考察した間取りを比較すると、時代とともに土間部の床張り部分が多くなり、土間床が狭くなる傾向が顕著である。また、土間東側の背戸口の外側に接してダシヤと呼ぶ炊事場を増築している。

居室部のナカマは現在広い一室であるが、明治家相図では東西2室に描いてある。その間仕切り位置に現在もナカマを2室に分けた細目の差物、天井梁が残っており、床板の張り方も異なっている。ただし、これらの部材などは中古材で当初材ではないことから、ナカマは当初は広い1室であったが、一時2室にしたものを再度1室としたことがわかる。

ナカマ・カッテ境の差物E₇が当初材か否かの判断は難しいと前述したが、当初材であれば間取りの大筋は現状と変りない。後補材であれば、ナカマはカッテ部分を取りこんだ1室となり、差物E₇上の束が独立柱としてナカマの中に建つことになる。この復原に関してはさらに調査研究が必要である。

座敷部背後のナンドは当初4畳大の狭いものを、孫下屋の拡張により6畳大の部屋となった。

なお、カッテとヤリカクシの間仕切は、家相図が誤りで、ヤリカクシの間仕切は当初から現状と同じく後部まで延びていた。

3-2 付属屋および石造物の復原

付属屋は小規模で簡素な建物が多い。馬屋以外の建物と石造

小祠にはほとんど改造がみられない。そのためここでは、馬屋について詳述する。

1) 馬屋の復原 1棟

馬屋は間口6間で、これを2間ずつ3室にわけ、向かって右端と中央の2室をウマヤ、左端を土間部屋としている。

外観上の変化 ①外壁は現在、真壁造であるが、各柱面に大壁造の痕跡があることから、建築当初は土壁の大壁造であった。②平成6年に建物の外まわり全体に土台を新たに敷きこんだ。当初は、柱は礎石立ちであった。③各部屋の背面に1か所ずつ、そして右側面の柱間に小窓をもうけているが、後補であり、当初、窓はなかった。④土間部屋の正面出入口の1間の建具は近年引違い明り障子を建てこんだもので、当初は引違い板戸であった。

内部 ①ウマヤと土間部屋境の仕切りは現在真壁造であるが、土間部屋側に大壁の痕跡があるので、当初は土間部屋側を大壁とする土壁であった。②ウマヤ前面の約4尺内側に柱2本を建て、ここをカイバヤ道具置き場とし、残る1間にマセ棒を入れていた。ただし、現在は右端のウマヤでは柱、マセ棒とも取り去って、ここを掘りこんで水道ポンプの設置している。これらの背後は、もとは地面を掘り込んで地盤を低くしていたが、現在は前面と同高にしている。④各部屋の中央梁間のほぼ内法高に角材を入れて側柱を突っ張っていた。ただ、中央ウマヤのものは取り外されている。

ウマヤの内部と前面の出入口はなん度か模様替えがあった形跡がある。

2) 馬屋以外の付属屋・石造小祠

2-a) 厩

大きな改造はないが、前面に並ぶ2つの大便所の背後の土間の掘りこみが崩れ浅くなっている。なお、外壁には修復の痕がみられる。セガイ造の出梁など構造に改造はない。



図48 厩のセガイ造の出梁の内部の納り

2-b) 小家

小家は大壁造でなく真壁造の建物で大きな改造はない。しかし、土間・居室境の前面から第1間の半間の土壁の内法下を破り、ここから相互の行き来ができるようにした。

2-c) 木小屋

木小屋は、柱、桁等に、大壁の細工跡や貫穴など現在使われていない痕跡が多くあり、建築当初から他の建物の古材を転用して建てたものである。後世の改造ではないようである。

2-d) 井戸屋形

井戸屋形は建築年代が新しく後世の改造がない。屋形脇の石造小祠も同様である。

2-e) 明神さま

小祠5基とも、小祠自体には後世の改造等はない。

第4章 岩手県指定文化財村上家住宅のまとめ

4-1 建物の破損状況とその進行

村上家住宅の各建物の破損状況は進んでいる。これまで村上和子氏は独自の努力で茅葺き屋根の建物を精一杯護ってきた。しかし、この修理の努力はすでに限界に達している。茅屋根ばかりでなく、外壁も破損が著しい。建具等も開け閉めが困難な状態にある。これらは早急に根本的な修理を必要とするのだが、それには莫大な費用が必要である。同家は岩手県指定文化財であるので、まずは県に資金援助をお願いしたい。そして一関市にも同様な援助をお願いしたい。さらに国には、当住宅の文化財としての価値を認め、将来的な保存の立場に立って、重要文化財に指定して保存する配慮をお願いしたい。

4-2 村上家住宅の文化財指定と管理の現状

岩手県有形文化財村上家住宅は、敷地内に主屋を始め、付属屋を含めて茅葺きの建物6棟がそろう、さらに石造小祠もあって、伝統的な屋敷構えが整っている。このように茅葺き建物が多くあり、これを護っている民家の例は東北地方において他にないであろう。しかも、村上和子氏が長年にわたって自ら茅刈をするなどして、自力で護り続けている。今後は屋敷構え全体を重要文化財として保存していくことが望ましい。

これまで述べた村上家住宅の特徴と現状の管理状況をまとめ、東北地方2県にある重文民家との比較をした上で、村上家住宅の価値を位置付けたい。

主屋は小屋梁（上屋梁、扱首梁ともいう）が5間あって梁間が特に広い。復原すると平面は土間部が広く居室部とほぼ同じ面積をもっている。間取りは、広間型三間取りのように簡素でなく、やや複雑な間取りである。書院座敷とまではいかなくとも2室の続き座敷があり、奥行きの浅い床の間もある。座敷背後には納戸がある。これら居室と土間部の間の部屋は表裏2列にわかれ、裏側の座敷寄りに五畳大の縦長のヤリカクシと称する部屋があり、現状ではオカミ背後の下屋に設けてあるカッても同じく五畳大の広さである。このように当家の間取りは、広間型三間取りより発達した状況にある。とはいえ書院座敷が整う以前の形態を示している。

梁組など構造形式を見ると、上屋と下屋からなる形式である。両側2本の上屋桁（土居、地まわり）の断面が大きく形状は角材でなく、ウリムキ状の丸太材であって、桁というよりは梁と同様の断面を有している。この材は東北地方で土居と呼ぶ部材であって、他家にも用いられている。上屋桁の中間を3通りの中引で受け、強固な小屋組を作る。この構造形式は新しい傾向であり、江戸後期の大規模な民家にみられる特徴である。

外観をみると、建物の丈が高いことで、正面を一見すると二階建てにみえる。外部に面する壁面が正面と、両側面・背面の3方が当然といえば当然であるが、大きく異なっている。正面は開口部が多く真壁造であるが、他の3方は開口部が少なく建築当初は大壁造であった。

内部空間の特徴として、土間、背面通りの部屋に天井が張ってなく、梁組、小屋組を見せている。特に広い土間空間には天井を張らないことを意識して、下手の妻通りに太い多角形の独立柱を2本建て、梁組を格子状にし、重ね梁を多用して豪壮な感じを表現している。天井のある部屋は天井が高い位置に張ってあるので室内空間が大きく感じる。

建築以来の増改築は比較的少なく、建築当初の姿に復原する



図 49 主屋茅屋根の差し茅作業



図 50 カマドとカマド神



図 51 外壁破損状況 2006

図 52 破損状況 2010



図 53 破損詳細 2010

ことがほぼ可能である。ただし、文化財として解体修理など根本的な修理をしていないので、十分な復原案は提示されていない。現状では、完璧な復原調査が困難な箇所もあり、復原案も一応のものを提示するにとどまっているのは、いたしかたない。将来に期待したい。

4-3 岩手県・宮城県内の重文民家との比較

1) 岩手県・宮城県の重文指定等の民家リスト（表3）

村上家住宅が所在する岩手県および直ぐ南に隣接する宮城県内の重要文化財指定民家の名称、所在地（移築したものは旧所在地）、建築年代、規模（曲家では曲り部分を除く）、間取りを書きあげると以下の通りである。

表3 東北地方2県の重文等指定民家一覧表（*印：宅地指定）

名称・所在	建築年代	桁行m×梁間m	面積㎡	備考
岩手県（10件）				
旧中村家・盛岡市	文久元	9.6×15.9	=152.64	町家
旧藤野家・江刺市	19世紀前半	14.9×8.9	=132.61	
旧後藤家・江刺市	江戸中期	21.5×10.5	=225.75	
旧佐々木家・岩泉町	明治初期	16.4×9.1	=149.24	
旧菅野家・北上市	享保13	21.3×11.6	=247.08	
多聞院伊澤家・和賀町	1900年前後	20.4×11.2	=228.48	
旧菊地家・東野市	18世紀中頃	20.3×9.1	=184.73	
伊藤家・東和町	18世紀後半	13.7×9.6	=131.52	
旧小原家・東和町	18世紀中頃	16.3×9.6	=156.48	
千葉家・遠野市*	江戸末期	25.9×11.7	=303.03	
村上家・千厩町*	18世紀後半	17.9×12.3	=220.17	県指定
宮城県（6件）				
洞口家・名取市*	宝暦頃	22.6×11.0	=248.60	
旧中沢家・名取市	江戸後期	16.5×9.5	=156.75	
旧佐藤家・角田市	江戸後期	14.9×7.8	=116.22	
我妻家・蔵王町*	宝暦3	26.3×12.1	=314.60	
松本家・小野田町	江戸後期	10.1×7.7	=77.77	
今野家・橋浦村	明和6年	21.8×10.9	=237.62	県指定

上にあげた岩手県、宮城県の指定民家16件に見るとおり、宅地指定は洞口家、我妻家、千葉家と村上家の4件に過ぎない。また、指定名称の頭に「旧」が付くものは、公有化されて移築したもの、また本来の所有者が変わったものなどである。岩手県が多聞院伊澤家、伊藤家、千葉家、村上家、宮城県の洞口家、我妻家、松本家、今野家を除いて「旧」が付いている。

特に岩手県では重要文化財指定物件10件の内、現地に所在するのは、旧菅野家、多聞院伊澤家、旧小原家、伊藤家、千葉家の5件であって、残る5件は移築して保存された。指定当時、移築しなければ保存できないという事情はあったにせよ、あまりにも「旧」付きが多いのは残念である。

2) 村上家住宅の特徴個所と重文民家との比較

村上家住宅主屋の間取り、構造形式などにみられる特徴を取りあげて、岩手県・宮城県内の重文指定民家に同じような特徴があるか否かを探ってみる。これらの特徴は、当主屋の建築年代を推定する指標になり、また、地域性、階層を考える上で参考になる。

a 間取り

村上家の居室は、土間ニワに接して表側にナカマ、裏側にオカミなどの部屋があって表裏に分かれている。すなわち広間型三間取りのように、土間ニワに接する部屋が、表から裏に達す

る広間1室でない。

表裏に分かれる系列の間取りの民家をあげると、江刺の後藤家、北上の菅野家、江刺の藤野家、佐々木家、桃生の今野家、名取の洞口家、東和の小原家、遠野の菊池家がある。表裏に分れない広間型に蔵王の我妻家、東和町の伊藤家、角田の佐藤家がある。

これら表裏に分かれる間取りの民家は、広間型系の民家にくらべて、一般的に規模が大きい。ただし、広間型系であっても、我妻家のように大規模のものがある。

次に、ヤリノマなどと称する細長い縦型の部屋が、部屋と部屋の間の挟まっているもの。裏半部にあるものに改造後の後藤家、菅野家、小原家、表半部にあるものに菊池家がある。

周囲を部屋で囲まれた、この部屋は主に寝間として用いられたのであろう。比較的建築年代の古い家にみられる。

上手座敷部の表側に2室の続き座敷があり、この背後に納戸があるもの。後藤家、菅野家がある。背後に納戸はないが、続き座敷であるものに今野家がある。なお、我妻家の座敷は上手突出部にあつて、建築年代は文化9年（1812）で本体より60年後に造設したものである。

2室の続き座敷があることは上層の家である証しである。すでに十七世紀の家にみられる。

トコノマの存在。後藤家、菅野家、藤野家、今野家、中沢家、洞口家にある。上層の家であることを示している。

居室部に接して土間の前半部に縁、後半部に板間があるもの。

今野家、我妻家、洞口家、菊池家がその例である。なお、今野家は板間の後部に棚があつて、村上家によく似ている。

土間ニワに板間が造られるのは新しく、この板間は時代とともに拡大される傾向にある。特に古い家には板間はない。

b 構造、形式

土間ニワの多角形断面の独立柱とその数（曲家を除く）

村上家の土間に独立柱が2本建つ。後藤家10、菅野家6、我妻家6、藤野家2、今野家1、佐藤家4、中沢家3、洞口家7。

一般的には独立柱の数が多い方が古い家にみえ、実際にも古いという傾向があるが、独立柱の数と実際の建築年代の古さとは必ずしも比例していない。この関係は地域的な差が大きいのだろう。

c 土居と中引の存在

当地方の民家では上屋桁の断面が一般的に大きく、この部材を「土居」と呼んでいる。棟通りに桁行に配される梁を「中引」といい、土居と土居の間の桁行の梁も同様に中引と呼ぶ。村上家では前後両上屋通りに土居があり、この中間に中引が3本通っている。各家の土居と中引の数をあげる。

後藤家：土居2・中引0、我妻家：土居2・中引1、佐藤：土居2・中引1、中沢家：土居2・中引1、洞口家：土居2・中引1、菊池家：土居2・中引0。

上でみるとおり土居は各家にあるが、中引を用いていない家もある。梁間が広い村上家の3丁は最も多い例である。整った梁組構造になっており、新さを感じさせるとともに裕福さも感じさせる。

d 外まわりの壁面と縁側

復原した村上家の外まわりの壁面は、正面（ここでは正面下屋部分は吹き放しであるので上屋通り正面を指す）真壁造、両側面・背面の3方大壁造である。

土間まわりの外壁3方は前面（正面）に大戸口、下手側面に背戸口を開くが、背面には開口を設けなかった。ただ後世に土間ニワ後部に板間ができると開口を設けた。ナカマ前面には開口が広く開き、続くシモデ前面には1間の開口が開き、外縁（濡縁）を設ける。次に上手妻面の大壁造に、シモデに半間、カミデに

1 間の開口がある。背面には開口部がなかったようである。

縁側は十七世紀の古い家にほとんどなく、開口部の前に小縁を作り、また踏み石や踏み丸太を置いて、内部へのあがり下りの便をはかった。村上家の建築当初はシモデ前面に外縁があるが、ナカマ・イタノマ前面は縁板を張らない土縁であったようである。

岩手県、宮城県の指定民家の縁側の概略は以下の通り。

後藤家、正面開口部に小縁。菅野家、正面と上手側面に外縁。伊藤家、正面に土縁。今野家、正面から上手側面に外縁が巡る。佐藤家、正面に外縁。中沢家、正面、背面一部に外縁。洞口家、正面に外縁。藤野家、小縁。佐々木家、正面、上手側面に内縁、(小原家、正面一部に外縁。) 菊池家、外縁および小縁。

e 外部に面する建具

外部に直接面する建具の戸締り、雨仕舞いは、敷居鴨居に3本溝を掘り、外側の2本溝に板戸を建て、残る内側の溝に明り障子を建て明りとりとした。いわゆる3枚戸形式である。これより古形式は板戸のみで明り障子を用いない。新しい形式は2本溝に明り障子を建て、そのすぐ外側に雨戸を建てる。なお、最も新しい内縁の場合は、縁先の下屋柱外側に雨戸を建込む。村上家の現状ではナカマ、イタノマ前面の内縁にみられる。

雨戸には戸袋が伴うのだが、村上家ではナカマ正面に立派な大型のものがある。片屋根を付け彫刻を付けている。この立派な戸袋は後世に縁側とイタノマを新設した際に作ったもので新しい。古い戸袋は内法高に板の枠を組んで、雨戸をここに立て掛けるごく簡単なもので、背面にある。

f 部材の仕上げほか

柱、梁、差物など構造材と長押、鴨居や建具の板など化粧材の表面の仕上げの工具が異なっているように見える。化粧材の方が細やかな仕上げになっている。仕上げの工具として、カンナ、ヤリガンナ、チョウナ、ヨキ、ハビロなどが考えられる。

村上家の柱を観察すると、幅広の刃物で仕上げているように見える。柱面を一杯に斜めの刃型があるもの、この場合は工具の刃わたりが18 cm程度以上あることになる。もう一つは斜めの刃型であるが、柱面で山型、谷型になっているものである。これだと刃わたりは10 cm程度でよい。

この仕上げがカンナでないことは明らかであるが、チョウナであるか、ヨキ、ハビロ、その他の道具であるのか、その詳細を知る調査研究が必要である。

なお、イロリの位置、形式、ヨコザの背後の柱間装置、仏壇、神棚の位置なども、地域や階層、建築年代を示唆する要素であると考えられるが、後考を待ちたい。

4-3 村上家住宅の建築年代・位置付け

移築物件が多い岩手県の指定民家のなかにあつて、村上家住宅のように移築せずに現地で保存が可能な国指定民家が必要であると考ええる。

太平洋に面する宮城、岩手の両県は大局的にみると、藩政時代には仙台藩と南部藩に属し、南部藩の民家「曲家」の存在はよく知られている。村上家は旧仙台藩内北端にあり、馬屋は別棟で主屋の下手前面にある。主屋と馬屋の位置関係は南部の「曲家」と同様であるが「曲家」ではない。

村上家住宅の復原考察によって、主屋の建築当初の姿が一部を除いて判明した。しかし、建築年代は、棟札や普請帳などの文献資料がなく確定できず、また岩手・宮城両県の重要文化財等指定民家と比較して、様式編年したのだがうまくいかなかった。最終にはやや抽象的になるが、様式、建築空間を把握して建築年代を推定した。これによると、村上家住宅主屋の建築年

代は十八世紀後半以降、1800 年前後と推定された。ここに推定した年代幅は50 年ほどもあつて、非常に幅が広い。何故これよりも幅を狭められなかったか。その理由は、村上家住宅近辺の一定の狭い地域範囲に、同家と比較すべき適当な階層で、建築年代が確定している基準となる民家が存在していないことになっている。いいかえれば、今回の比較している民家の分布範囲が岩手・宮城両県の広い範囲にわたっており、これだけ広い地域になると様式編年の変遷過程を示すに足る指標が細かい点になると、地域によって相当に違っているのである。

岩手・宮城両県の重要文化財など指定の十八世紀中頃以降、後半の民家として、岩手県の菊池家、伊藤家、小原家、宮城県の、我妻家、洞口家、中沢家、佐藤家、旧今野家などがあり、これらは同じ年代グループに属するものと考ええる。

今回の調査研究で、復原、編年考察によって一定の成果をあげることができた。ただ、この成果はいまだ研究半ばである。今後のさらなる調査研究を期待する。なお、村上家住宅を重要文化財建造物候補としてあげるのであれば、表4 の対象物件が考えられる。

表4 村上家住宅重要文化財指定候補物件一覧表

名 称	員数	屋根形式、葺材	桁行 × 梁間 (m)
主 屋	1 棟	寄棟造、茅葺き	桁行17.89 × 梁間12.33
馬 屋	1 棟	寄棟造、茅葺き	桁行11.00 × 梁間 4.84
廁	1 棟	寄棟造、茅葺き	桁行 3.96 × 梁間 2.45
小 家	1 棟	寄棟造、茅葺き	桁行12.22 × 梁間 4.77
木小屋	1 棟	寄棟造、茅葺き	桁行 5.09 × 梁間 3.48
井戸屋形	1 棟	切妻造、茅葺き	桁行 1.52 × 梁間 1.21
附・井戸屋形棟札 1 枚「昭和六十三年六月」の記がある。			
・水神さま 1 基 一間社流造型 石造小祠			
明神さま 5 基 各一間社流造風、石造小祠			
住宅全体の附 家相図「明治二十二年」の記がある			
宅 地、土地指定			

【参考文献】

- ・文化庁文化財保護部建造物課編『国宝・重要文化財建造物目録』1999 文化庁
- ・建築修復学会編『若き建築職人たち』 2002 建築修復学会－建築修復学会千厩大会2002＋長岡造形大学宮澤研究室
- ・日名子元雄編『旧国宝・重要文化財指定説明』1975 文化財建造物保存技術協会所収
- ・佐藤巧編「岩手県東磐井郡千厩町村上家住宅実測調査報告書」1996 (私家版)
- ・東北歴史博物館編『宮城県指定有形文化財今野家住宅復元工事報告書』 2000 東北歴史博物館
- ・宮澤智士 安井妙子編『長寿命省エネ住宅への道』2006 住まいと環境東北フォーラム

東日本巨大震災による災害

岩手県指定文化財村上家住宅は、2011 年3 月11 日午後2 時46 分に発生した東日本大震災、その後の余震により、大きな被害を受けた。建物が倒壊することはなかったが、地盤の振動、ゆるみにもなつて、礎石や柱の足元が動き、建物の傾斜が大きくなり、土壁が落ち、カマドが崩れるなど屋内外ともに大災害をこうむった。



図版1上 村上家屋敷の環境。主屋と馬屋、前面の庭園、背後の樹木、竹藪

図版1下 土間ニワ。表から後部をみる



図版2上 土間ニワ。イロリと背面およびチャノマ境

図版2下 薪の燃えるイロリと背後のムソウ窓



図版3上 茶の間の上手側をみる。仏壇、戸棚、仙台箆箭2竿が並ぶ



図版3下左 シモデからカミデのトコノマをみる。10尺の天井高
図版3下右 前面縁側を上手から下手をみる。板天井が貼ってある



図版 4 上 前面縁先の戸袋。吹き寄せの押縁を施した下見板張り。屋根付きで彫刻を施す

図版 4 下 天井の高いナカマ。神棚、丈の高い障子欄間が入る。奥はシモデ



図版5上 ナカマから前面の縁側を通して庭園を望む



図版5下 オオデから表に面するシモデをみる。低い位置に根太天井が張ってある



図版6上 又首組の小屋組。小屋梁が5間と長い。棟束が立つ。腰屋根から光が入る

図版6下 土間二ワの梁組の見せ場。天井がなくウシモチ柱に縦横から架かる、豪華な梁組